



世界の農業・農政

インドの主要農産物をめぐる諸問題と価格支持政策の関係 ーコメ・小麦および砂糖についてー

政策研究調査官 草野 拓司

1. はじめに

12 億人を超える超人口大国インドは世界有数の農産物生産国であり、消費国です。特に穀物（コメと小麦が中心）においては、生産、消費とも大きなシェアを握っており、これまでも世界市場のかく乱要因になってきました。また、近年では急速な経済成長に伴う国民所得の増大によって、「食の高度化」が進み、砂糖や畜産物などへの需要が急速に高まっていることから、これらの品目でも世界市場のかく乱要因になる要素を含んでいます。そのため、主要穀物に加え、砂糖をめぐるインド国内での状況を捉えることが重要な課題となっています。そこで本稿では、主要穀物であるコメと小麦に加え、砂糖を取り上げ、それら農産物を取りまく問題とその背景にある価格支持政策の関係を検討します。

2. 財政負担の拡大を引き起こす価格支持政策

（1）財政負担の拡大

はじめに、インドにおける食料補助金の推移を第1図でみましょう。食料補助金とは、公的分配システムによって分配されるコメや小麦にかかる政府補助金のことです⁽¹⁾。この図から、2000年代後半以降の食料補助金の急増がわかります。13/14年には9,200億ルピーに達し、対GDP比で約1%（13/14年）、対中央政府支出で約6%（12/13年）となっており、インド政府にとって非常に重い負担になっているといえます。

（2）財政負担拡大要因としての価格支持政策

それではなぜ、食料補助金がこれほどまで拡大したのでしょうか。これには、公的分配システム下で設定されている最低支持価格が大きく影響しています。最低支持価格は、名目価格でみると近年の増加が顕著で、実質価格でみても、09/10年以降は100kg当たりおおよそ600ルピーを上回り、高止まりしています。その結果、多くの生産者が政府（インド食料公社および州機関）にコメや小麦を売ろうとする行動に出たため、生産量の30%を超える3,400万トン～3,500万トンが政府による買上げとなりました。

インド中央政府は買い取ったコメや小麦を各州政府へ売り渡しますが、売渡量は増加しているものの、おおよそ買上量を下回っています。その結果、在庫量が膨張し、

適正在庫量を大きく上回っています（13/14年では在庫量が適正在庫量の215%）。また、最低支持価格が上昇を続けている一方で、売渡価格は02/03年から据えおかれているため、逆ざやが拡大を続けているのです。

小麦についても、コメと似た状況にあります。近年の最低支持価格の高止まりにより政府買上量が増加している一方で、売渡量がそれを下回っているため在庫が膨張し、12/13年には在庫量が適正在庫量の346%まで膨れあがりました（13/14年は255%）。また、コメと同様、最低支持価格が上昇を続ける一方で、売渡価格は据えおかれているため、逆ざやの拡大が続いています。

以上のようにして、高い最低支持価格に伴うコメと小麦の在庫膨張に加え、逆ざやの拡大により、食料補助金が拡大を続けているのです。

3. 砂糖需給の不安定性を引き起こす価格支持政策

（1）砂糖需給の不安定性

第2図は、インドにおける砂糖の純輸入量の推移を示しています。これをみると、1980年代半ばに純輸入国になってからは、2～3年の間隔で純輸出と純輸入を繰り返していることがわかります。特に、2000年代の輸出入の変動は激しく、07/08年には601万トンの純輸出に達していますが、09/10年には221万トンの純輸入となっています。

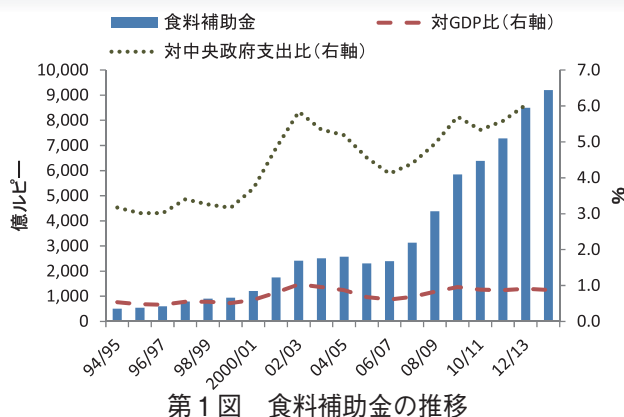
このように砂糖の純輸出と純輸入を繰り返さなければならない要因は、インド国内での砂糖の消費量と生産量にギャップが生じているからです。なぜそのようなギャップが生じるのか、以下でみていきましょう。

（2）増加が続く砂糖消費量

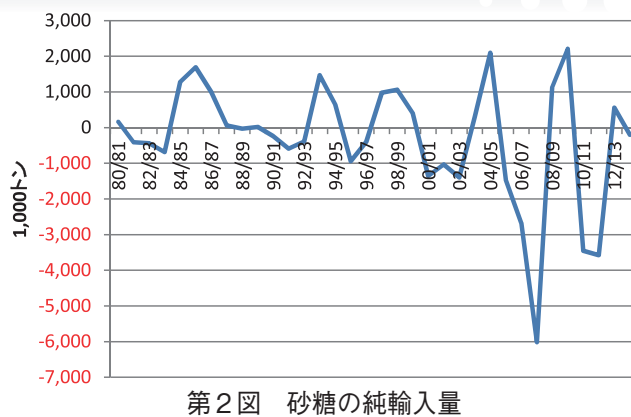
近年、インドでは砂糖消費量が急速な増加を続け、12/13年に2,500万トンに達しています。それは、1つには、継続する人口増加のためです。またそれに加えて、1人当たり年間消費量が80/81年は9kgでしたが、08/09年には20kgを超えており、着実に増加していることも消費量増加の一因です。国民所得の増大により、かつては高価で入手することが難しかった砂糖が身近なものとなったため、1人当たり年間消費量が増加しているのです。

（3）増減を繰り返す不安定な砂糖生産

砂糖の生産量は、2～3年ごとに増減を繰り返し



資料：GOI (Ministry of Finance) ウェブサイトおよび RBIウェブサイトより。



資料：USDAウェブサイトより。

ています。例えば近年の傾向をみると、05/06年の生産量は2,114万トンでしたが、翌06/07年には約1.5倍の3,078万トンに急増しています。しかしそれ以降は減少が続き、08/09年には06/07年の約半分の1,595万トンまで落ち込みました。そして09/10年から再び増加が始まり、11/12年には2,862万トンまで盛り返しています。砂糖の消費量が着実に増加を続けているのに対し、生産量はこのような不安定であるため、消費量と生産量の間にギャップが生じているのです。

このような砂糖生産量の不安定要因は、サトウキビ生産量の不安定性と深く結びついています。インドにおけるサトウキビの生産量は、砂糖と同様に2～3年ごとの増減を繰り返しています。それは、サトウキビの収穫面積の増減と連動しています。すなわち、サトウキビの収穫面積の増減が、サトウキビ生産量の増減を引き起こし、それにより砂糖の生産量が不安定になっているのです。

(4) 砂糖需給の不安定性を引き起こす価格支持政策

サトウキビ収穫面積が2～3年ごとに増減を繰り返す背景には、インドにおける価格支持政策の影響があります。サトウキビについての価格支持政策はいくつかありますが、中央政府が行うものが法定最低価格 (Statutory Minimum Price : SMP。2009年からは適正価格 (Fair and Remunerative Price : F & RP)) で、法定最低価格を上回ることが多い州勧告価格 (State Advised Price : SAP) などもあります。特に州勧告価格とサトウキビの収穫面積は強く連動しています。例えば近年の状況をみると、州勧告価格が落ち込んだ後の03/04年と04/05年の収穫面積は約393万ヘクタールと約366万ヘクタールにとどまっていますが、04/05年と05/06年に州勧告価格が高くなると、05/06年と06/07年の収穫面積はそれぞれ約420万ヘクタールと約515万ヘクタールに急増しました。07/08年に再び州勧告価格が落ち込むと、08/09年のサトウキビ収穫面積は約442万ヘクタールに減少しています。

このような現象の背景には、次のような動きがあると考えられます。サトウキビ作農民は、サトウキビの州勧告価格が上がれば、作付面積を増やします。そうすると、サトウキビの生産量が増えるのに伴い、砂糖の生産量も増えますので、砂糖価格が下がります。これをみて、政府は需給調整 (砂糖の流通量を減らす目的) のためにサトウキビの州勧告価格を下げます。それに加え、砂糖価格が下がることで、製糖工場による農民への支払いの遅延も生じるため、農民は作付面積を減らそうとします。その結果、砂糖の流通量が減るため、政府は需給調整 (砂糖の流通量を増やす目的) のためにサトウキビの州勧告価格を上げることにより、再びサトウキビが過剰に生産されるという循環になっているのです⁽²⁾。

このようにして、政府による価格支持政策に大きな影響を受け、サトウキビの収穫面積が2～3年ごとに増減を繰り返すため、砂糖生産量も2～3年ごとの増減が繰り返されているというわけです。

4. おわりに

本稿では、国際市場において重要な位置づけにあるインドのコメ、小麦および砂糖を取り上げ、課題を検討したところ、いずれも価格支持政策の影響を大きく受けていました。インドは国際市場における影響力が大きいだけに、これら農産物の動向について、今後も価格支持政策に注視していく必要があるといえるでしょう。

- (1) 公的分配システム、食料補助金、価格支持政策等の仕組みについては、首藤 (2006) 「公的分配システムをめぐる穀物市場の課題」『躍動するインド経済 光と陰』、および草野 (2015) 「カントリーレポート：インド」『平成26年度 カントリーレポート：インド、アルゼンチン、ベトナム、インドネシア』を参照のこと。
- (2) この点については、次の文献において、砂糖の市場価格の変動と、製糖工場および契約農家との関係から説明しているので、参照いただきたい。独立行政法人農畜産業振興機構調査情報部調査課 (2010) 「インド砂糖産業の概要－砂糖生産と政策－」『砂糖類情報』2010年4月号、およびUSDA (2010) , "Indian Sugar Sector Cycles Down, Poised To Rebound".